

魯迅とニーチェ

尾上兼英

一

魯迅の思想は、初期は進化論を、後期は階級史觀を基盤にするといふのが通説である。この「進化論から階級論へ」という變遷の圖式は、たしかに現象としては否定できないが、この二つの思想の受容のしかたについて、まだ十分な研究がなされているとはいえない。ここでは進化論とは、南京に學んだ際嚴復譯「天演論」(トマス・ハクスレー「進化と倫理」)によつて眼を開かれ、日本留學時代に讀んだ丘淺治郎「進化論講話」などによつて得た知識による、優勝劣敗の社會進化論を意味する。また周作人は、この頃梁啓超の諸論文から影響をうけたことも指摘している。そこで、一人の人間の、ある時期をとつて人間形成を追求するためには、多くの要素をからみ合わせ、さまざまの視點から考察する必要があるが、そのうちの一つに焦點を合わせて接近する必要もあろう。

日本留學時代の後期、東京において文學運動に専念するようになつて愛讀した、「Also sprach Zarathustra」は、かなり後まで強い影響を殘していたと考えられるが、ニーチェの影響については、ほとんど問題にされていないといつてよい。ここでは、どのように「超人」思想

の影響をうけ、どのように脱却したかについて考察してみたい。

二

魯迅がニーチェを愛讀したことについては、その頃寢食を共にしていた周作人に、次の證言がある。

ドイツでは、ニーチェ一人を取つた。「ツアラトストラかく語りき」をつねに机上におき、その序説一篇を譯出して、雑誌に載せたことがある。たぶん「新潮」だつたらう。(魯迅についての二)

「新潮」とは、北京大學學生の傅斯年、羅家倫らが計畫し、教授であつた陳獨秀、胡適らの援助で出版された雑誌である。のち周作人も加わつた。「序説一篇を譯出し」というのは、二卷五號に載せられた序十章の白話譯を指す。それ以前にも、魯迅はすでに文言譯を試みており、譯稿の題名から見ると全譯を志したものと推察され、傾倒のはどがうかがわれる。

白話譯には「ニーチェの文章は名文であるうえ、この書物は箴言でできているので、表面的には矛盾が多くて理解するのに容易ではない」という註をつけて、各章の大意と難解な語句の解説をしている。この註については後にも觸れるが、まず、魯迅に對するニーチェの影

響を論じた説をあげてみよう。

日本では、竹内好「魯迅」において、魯迅がニーチェを酷愛したことを指摘し、断片的にはあるが次のように述べている。

彼はたしかに、進化論の影響をうけている。しかし……彼にはもつと、何かわからぬがストイックなものがあるように思う。進化論は影響したが、それはニーチェ的に影響したのだ。

〔梁啓超式の成功をすてて失敗の道を選び、文學の國民的解放を求めて、一見反對の方向にある章炳麟の門に入る。このような行動は〕そのころ、ニーチェを愛讀したことは、そのような彼の精神の位置にふさわしいことであつた。

〔「孤獨者」の解説の最後に〕彼は留學時代からニーチェを愛讀していた。(ニーチェの影響は、マルクス主義に接するまで續いたようである。)彼は、彼自身の「超人」を創造しようとしたのではないか。

思维方法、行動原理、創作方法にわたつて直觀的な鋭い指摘であるが、十分な分析をへていないし脱却のしかたにまでは及んでいない。また脱却の時期についても問題がある。

中國では、瞿秋白が「魯迅雜感選集序」において、日本留學時代の魯迅の思想を概括し次のように述べている。

當時における魯迅の思想的根據が、ニーチェの「個人を尊重し物質を排除する」學説であつたことはいうまでもない。

魯迅が、當時ニーチェ主義に傾いていたのは、特殊な社會關係を反映しているのである。

瞿秋白は、「都市の勞働者階級が、また大きな自覺した政治勢力にまでは成長せず、農村の農民大衆は、自然發生的な無自覺な反抗闘争しかしなかつた」歴史的條件における戰闘的意義を高く評價している

が、あくまでも、中國の後進性という特殊な條件を前提にして肯定するのであつて、ニーチェの思想そのものは、新興階級である大衆の進歩と改革を妨害するブルジョワ階級の反動思想として否定すべきものと考へているのである。その點では、その後の中國の左翼評論家の見解は一致している。この公式的な評價にも問題がある。

三

魯迅がニーチェをしばしば引用している論文は、「マラ詩力説」(一九〇八・二・三)と「文化偏至論」(一九〇八・八)である。その引用のしかたを見ると、その意をとつて要約し、再構成している。たとえば「文化偏至論」にひかれたニーチェのことをあげると、

われは行くこと遠きに過ぎ、伴侶を失いただ一人となつた。引き返して現在の世を見ると、文明の國である。雑色の斑紋の社會である。とくに、その社會たるや確固たる信仰がない。民衆の知識には、生産と創造の性質がない。このような國に、どうしていつまでも留つていられよう。われは父母の國から追放される。わずかに希望をもてるのは、子供の國だけである。

「ツアラトストラ」第二部「教養の國」の原文と比較してみると、比喩的表現を切りすてて一章の主題を簡潔にまとめ、自説の補強に利用していることがわかる。しかし、その際の重點のおきかたが、兩者に差のあることは注意しなければならぬ。ニーチェの場合は、現在の「教養ある社會」が、實は雑多な文化の寄せ集めで生産と創造を缺き、いかにいとわしいものであるかをくり返し強調し、「未發見の國」「わが子の國」——つまり人類の將來のあるべき姿としての超人の國へ逃亡することを宣言し、わが罪をわが子において償おうというので

ある。魯迅の眼にうつつた中國は、まさしく雑多な文化が流入し、小才のきく連中が「富國強兵」などの既成の實利主義へ走つて、「創造」を缺いていた。しかし、彼は現世を嫌惡することよりも、「創造」と「子供に希望を托する」ことに重點をおき、個性の解放を目ざしてはなはだ戰闘的である。ここでいう「創造」とは、もちろん「愚人の價値の表を粉碎する破壊者」の行動を意味し、「子供」とは、創造する者より以上の一人を生産しようという二人の意志に結婚の結果生まれ出た「超人」である。第一作品集「呐喊」の冒頭をかざる「狂人日記」の結びの「子供を救え」の叫びとなり、あるいは「自分は因襲の重荷を背おい、暗黒の開門を肩でささえて、かれら(子供たち)を廣々とした明るい場所へ行かせよう」(「われわれはいまいかにして父親となるか」という決意の表明となつた青年への期待は、ここに胚胎している。「マラ詩力説」は、周知のごとくバイロンの反抗詩人を軸として、天才に超人の歴史をたどつたものである。それによつて魯迅は、「精神界の戰士」の奮起をうながしながら、みずからその先頭に立つて戦う意志を表明した。そのことは、バイロンが「自分が臂を振つて一たび呼びかけたならば、人々は必ずや靡然として自分の下につき従うに違いない」と信じていた、と述べる際の共感にとくに強く現われている。彼みずから、そのような一人と思つていた、少くともそうありたいと願つていたに相違ない。「呐喊自序」の「私は決して臂を振つて一呼すれば、應ずるものが雲のごとく集まるといつた英雄ではない」と回想し、反省することはが、そのことを證明するであろう。この論文でも、しばしばニーチェが引かれているが、當時は、中國の改革、中國人の精神の改造は、一人の天才の出現によつて可能になり、未來が開けると考えていたと見てさしつかえない。この點を正面から

力説したのが、「隨感錄三十八」の「個人的自負」である。

一切の新思想は、たいてい彼らから出てくる。政治、宗教、道德上の改革も、彼らにいとぐちを發している。

彼らというのは、「個人的自負」の持主、つまり幾らかの天才をもち、幾らか狂氣である人である。この一文は、直接的にはイブセンの「民衆の敵」を媒介にして書かれたものであるが、「マラ詩力説」において、イブセンとニーチェは共に超人を守護し、出現を期待する人として同列に扱われていたことを思えば、「マラ詩力説」の直系の評論といえよう。

「個人的自負」と對置される「集團的愛國的自負」(これを甲から戊までの五種に分類し、精神的勝利法のタイプとして定式化している)は、先にあげた「ツアラトストラ序言」の白話譯の註に述べられた「聰明で傲慢なのが超人であるが、愚昧で傲慢なのは大衆である。そして、この愚昧で傲慢なのは、教養の結果である」ということばと對應する。

このテーマは「熱風」の「戰士と蠅」「夏の虫三つ」においても、くりかえされている。

戰士が戰死したとき、蠅どもがまつ先に發見したのは、彼の缺點、傷跡であつた。貪り食いついて、ブンブン叫びながら得意になり、死んだ戰士よりもつと英雄のつもりである。(「戰士と蠅」)

蠅どもは、そのおそるべき無邪氣さのうちに、なんじから血を吸わんとしている。——かれらの血の氣なき靈魂は、血に渴えている。——この故に、かれらはそのおそるべき無邪氣さのうちに、蝨をもてつき刺す。(「市場の蠅」)

この兩者を比べてみれば、權力者と愚昧な民衆に對する超人・戰士

という關係における發想の類似だけではなく、素材の選擇においても共通している。同様な例をもう一つあげるならば、

われは愛する、——没落^⑥して犠牲となる者を。——（中略）——いつの日か大地が超人のものとならんそのために、みずからを大地にささぐる者を。

われは愛する、——勞働し發明する者を。この人は超人のために家を造り、超人のために大地と植物とを備えんとして、しかくなす。故に、この人はみずからの没落を願う。

これは「ツアラトストラ序説」の第四章であるが、「天才の出る前」と題する北京師範大學附屬中學での講演と重ね合わせるができる。しかし、魯迅にとつては、天才を生み育てる民衆、つまり天才を培養する土にならうという提議は、切實な目標を示したものである。これによつて彼は、すでに豫言者的地位から實踐者の場に移つたことがわかり、超人を求める欲求の質にニーチェとは微妙な差が生じていたことを示している。だが、この二つの例からも、一九二四・五年頃までは、ニーチェの超人思想はかなり素直にうけ入れられていたと推定することは可能である。

四

先に引用した周作人の「魯迅についての二」の文章の續きに、「ニーチェの進化論的倫理觀は、私も面白いと思う。しかし、私は演劇式なもののがきらいで、ああいつた格調や文章は、あまり私の好みに合わない」と述べているが、周作人の嫌つた點を、魯迅は好んだということができる。

魯迅は自作の「狂人日記」を批評して、「ゴッゴリの憂憤の深く廣

いの比べられるが、ニーチェの渺茫には及ばなかつた」といつているが、格調の高いスタイルで「渺茫」をうけつぎ、作風の上で顯著な影響のあとを残しているのが「野草」である。

なかでも最も濃厚に、題材や構成の上にも影響の見られるのが「過客」である。そのテーマは、歩くことが自己目的化した完結した行爲をする旅人が、娘と住む老人の家にさしかかつて、ひと休みして過去をふりかえり自己の行爲を檢討しようとするが、その餘裕を許さないほど緊迫した未來（そこには墓がある。つまり未來であると同時に過去である重なり合った場）からの呼び聲にせきたてられて、歩きつづけるというものである。この歩くという行爲については、「ノラは家出してからどうなつたか」の中で、キリストの呪いをうけた Alsbet の名をあげているが、それが念頭にあつたのであろう。旅人も呪われた人の一人である。もし彼に好意を示すならば、その人の破滅を祈り、見とどけようとする殘忍な心情の持主である。あらゆるものを飲みつくして、無目的に歩くという行爲のエネルギーに轉化しようという人物であるから。

「野草」の中で、唯一的一幕劇形式であるこの作品は、「ツアラトストラ序説」から示唆を得て構成されたのではないかと推測される。それは、「序説」の二章にある、啓示をうけて人界へ降り超人を説こうとしたツアラトストラと老聖者との對話が、「過客」の旅人と老人の對話に重なり、「序説」の八章のツアラトストラと隱者の對話が、旅人と娘の對話と重なるという關係を設定することができるからである。「過客」の老人は、東・南・北と歩きつくし、歩くことの無意味さを知りつくした人物である。そこで旅人に忠告し、ひきとめようとする。それが善意に出るものか、惡意によるものかは別として、行動

者の行爲に水をさすものであることに變りはない。老聖者も、ツアラトストラの行手に立ちふさがり、彼の行爲の無意味さをさとす。

いかなれば、われは森と荒涼の中に入り行つたのであるか。これすなわち、わが人間を愛することあまりに甚しかつた故ではないか。いま、わが愛するは神である。人間ではない。

「過客」の老人と同様、老聖者もかつての先覺者であり、現在の非行動者である。老聖者にむかつてツアラトストラは「われが、なんじらより奪うこと無からんがために、速かにここを去らしめよ」というつまり老聖者は、娘の役割りの一部もになつてゐる。隠者は疲れきつたツアラトストラのために、パンとブドウ酒を與える人である。この人間關係から、「過客」は「序説」の二・八章が材源となつてゐると考えられる。大きな相違點は、人物配置において「過客」は、老人・旅人・娘が、過去・現在・未來を象徴してゐることである。行爲についてみれば、死者（網渡り人の死體、進化の過程から落ち過去の存在となつたもの）を背おつて、休息を拒否する聲（道化役者の呪い）に追い立てられて歩くツアラトストラには、旅人との一致點が認められる。

「乞食者」という作品で、乞食することが作者自身にとつて、あるいは中國の全人民に課せられた、既定の宿命的な行爲として描かれたように、歩くことは、歩くこと以外は考えられない唯一の積極的行爲である。効果を豫測できない絶望的な行爲であるが、結果は道となつて残る。道について、魯迅は「隨感錄六十六、生命的路」および「故郷」で、次のように述べてゐる。

路とは何か。それは路のないところを踏み歩いてできたものである。茨ばかりのところを伐りひらいてできたものである。以前にもすでに路はあつた。以後も永久に路はあるはずだ。（隨感錄六十六）

思うに、希望とは、もともとあるものだともいえぬし、ないものだともいえない。それは地上の路のようなものである。もともと地上には路はない。歩く人が多くなれば、それが路になるのだ。（故郷）

この「路」觀は、やはりニーチェから得たものであろう。そのことは、第三部「重壓の靈」の二章をみれば明らかとなる。

多くの路を越え、さまざまの試みを経て、われはわが眞理へと來たつた。……われは路を問うことを快しとしなかつた。……むしろ、われは路そのものに問い、之を試みた。試みつつ問い、問いつつ試みる——、之すなわちわが行路である。……われにむかつて「路を問う」者に、われはつねにかく答える。路そのものは——存在せぬ。路とは、このようなものであり、「過客」の旅人は、「路そのものに問い」「さまざまの試みを経て」進む求道者である。これが多くの先覺者にとつての宿命なのである。ただし、ニーチェの到達したところは「眞理」であるが、魯迅のは「墳」であつた。

他人の道案内ということになると、これはますます容易ではない。なぜなら、私自身にも、どう行くべきか見當がつかないからである。……私はひとつの終點だけを確實に知つてゐる。それは、墳だ。しかし、これは誰でも知つてゐることだから道案内はいるまい。問題は、ここからそこへ行く道にある。むしろ、道は一筋ではない。そのどれがいかという肝腎のことは、しかし私にはわからないのだ。（墳の後にしるす）

「誰でも知つてゐる」と、こともなげにいつてゐるが、墓の側にふみ込んで、そこから現實世界を見ろということとは、誰でもができることではない。生きながら自分を葬つて、新たな開眼をするという冒険

を、魯迅はあえてした。それが「野草」という作品集である。

「野草」について竹内好氏は、魯迅文學の縮圖であり原型とみなしうる、としばしば述べているが、氏の指摘するように、さまざまのスタイルと「即物的なもの、追憶的のもの、観念的のもの、象徴的のもの、諷刺的のもの」が入り混つており、それが「縮圖」といわれるゆえんであろう。しかし、傾向としてみるならば、幾つかのグループに分けることは可能であり、その試みもなされている。それぞれ教えらるるところも多いが、私は精神的冒険によつて認識を深化する發想法という側面から考えてみたい。

「野草」の究極は、死の世界から生を見る境地に到達することにあつた。だが、最初の作品から、そうであつたというわけではない。人の氣配のまつたくない夜半、異様な壓迫感をもつて迫ってくる、底知れぬ暗い空に輝く無数の星を眺め、みずからも季節の移り變りを経験しながら外界の變化を見る藁の木のもとで、「夜半の笑聲」を耳にする不安な情景を描いた「秋夜」は、分裂して、「雪」「凧」などの少年時代の想い出というリリカルな世界を導き出すと同時に、そこに秘められたぶきみな静けさが「影の告別」というおそるべき事態となつて發展する。

影に去られるということは、現實世界の存在から人間の資格が一つ失われて、幽鬼の世界に近づいたことを意味する。「影」は暗黒世界を指向する。暗黒に没入して「かくて、世界は完全にわが物となる」といいきるまでの暗い情熱にささえられ、光明を一切否定して暗黒そのものに全心靈を投入したとき、はじめて「負」のエネルギーという未知のものに接近することができる。もちろんそれは、一気に實現し

うるものではなく、中間の段階として、「乞食者」「復讐」をへて「希望」の「絶望の虚妄なることは、まさに希望と相同じい」という境地がある。しかし、それは現世的場における光明と暗黒の否定であつて、そこでの精神の飛躍には自ら限界がある。そこで、さらに自由な試みを可能にするためには、架空の世界の設定が必要となる。それが「好故事」から始まる夢幻の世界であり、「私は夢の中で……していた」の書き出しで始まる「死火」以後の連作である。「影の告別」で出された「無地」という不安定な、いらだたしい状態から、「死火」において架空世界と現實世界の接點を見いだすが、死火には現實世界を變革するエネルギーはない。そこで、死火のおかれた氷にとじこめられた世界は、「失われた好い地獄」で「地獄」にうけつがれる。

「地獄」は、それとかかわりをもたない人にとつては、お伽話にすぎないが、一度關係をもてば、全體世界の一員としての責任を要求する力をもつている。地獄の王者の地位から追われた魔鬼から、地獄の歴史を聞いたために、地獄と運命を共にしなければならなくなるといふ性質のものである。それ故に魔鬼のことを、「私」は無關心に聞きながすことはできない。亡者が「反地獄の叫び」をあげて魔鬼と戦い、人類が魔鬼の座を奪つて地獄の支配者の地位についた時、以前より一層悪い條件におちた亡者の味方となりうるのは、魔鬼でも、魔鬼に打倒された天神でもない。過去の亡靈をふりすてれば、これらに對立する、原始的エネルギーをもつた野獸や惡鬼以外には求められない。しかし、この未知なるものが、はたして實在するであろうか。何かにすがりつこうとすることは、精神の弱さの表現である。再び被支配者の位置に身をおくことしか意味しない。とすれば、この幻想の再來を破壊する必要がある。それが「墓碑銘」である。

「……答えよ、われに。さもなくば、去れ……」

私は、すぐに去ろうとした。だが、すでに死體は墓の中で身をおこし、口を動かさずにいつた。

「私が塵になる時、お前は私の微笑を見るであろう」

これが、胸も腹もさけて内臓のない死體のことばである。少しの妥協もなく、みずからの肉體を切り刻んでたじろがぬ強靱な精神を、ここに見ることが出来る。しかも、死體の消滅ということに、一種の爽快ささえ感じさせる。

外に存在する未知のエネルギーが幻想であるとして否定しえたとしても、「無地」であることは變らない。それでは、エネルギーの源泉をどこに求めるべきか。「くずれゆく線ふるえ」が、回答を與えてくれる。それは、「性」を通して内側から噴出する原初的エネルギーである。生存するために、貧しい母親のとりうる唯一の方法が、子供のエゴイズムによつて指彈される。だが、新しい世代の古き、無責任さによつては、母性は色あせぬ力にみちている。荒野の中央に石のように突立つ裸形の女性像は、古代神話に取材した「女媧」の超人像の人民版といえよう。民衆の歴史、そして人類の歴史は、このようにして作られるのである。

この作品に見られるもう一つの特徴は、子供が自分を生み育てた母親を攻撃する論理構造にある。子供を飢餓から救いだすための行爲が、賣春であつたことを子供は非難するのであるが、賣春以外に方法のない母親は、古い倫理に對立して「羞恥と歡喜」に身をまかせ、ついに生き通す。しかし、その結果餓死をまぬがれた子供は、「小さい時に餓え死にしたほうが、どれだけよかつたことか」といつて、母親の破廉恥な行爲を責める。このように古い倫理をもちだして、住居から追

出すのであるが、ここでは、もはや舊道徳の中で重要な地位を占めていた孝に對して、一顧もはらわれてはいない。古い倫理觀と對決した母親の新しいさは、舊道徳を借りて攻撃する新しい世代によつてふみ越えられている。母親の手中から飛びだした子供の誕生は、すでに單なる「進化論」では處理できない問題である。世代の連續性を否定する論理の中に、辯證法的思惟方法をうけいれる素地が作られつつあつたことを物語つてゐる。

夢を通して現實世界をみる視點で、地獄などの假空の世界と別の側面として、死後の世界がある。「死後」という作品は、腰細蜂によつて運動神經を麻痺させられる青虫の状態を、魯迅の身に移したものである。運動神經だけ死んで、知覺の生き残つた「私」が、自分の死後の状態を知覺し、死の意味を追求する。そこで發見したものは、死が死としての機能をはたさないとすれば、この絶望的な死をも拒否せねばならぬということである。「私は、ひとつの終點だけを確實に知つている。それは、墳だ」といつた「墳」さえ期待できないとすれば、死を安息の場と期待した希望を、破壊せねばならぬ。ここに至つてはじめて、魯迅が、限定し形を與えることのできなかつた最も根源的な疑いに、ひとつの終止符をうつことができた。「死火」「墓碑銘」「死後」は、死を軸として、ほとんど完璧に「無地」と對決しえてゐる。かくて、あらゆる幻想を拒否して、認識の基礎が確立したのである。「負」の世界を究めて確立した認識にもとづいて、現實世界の側を見ると、その構造は實に單純である。「このような戰士」の「無物の陣」が、それである。こちら側に戦うエネルギーがないためではなく、敵の側が「名」を武器として、實體は存在しない布陣であるので、こちら側のエネルギーが枯渴するのである。従つて、「不屈に執拗な

たたかひをつづける原始的なエネルギーをもつた戦士、すつ裸で蠻人の用いる投げ槍をもつただけの戦士のみよく敵對し得る」のである。しかし、「無物の陣」が打倒された瞬間に、「慈善家らの一味を殺害した」という罪名を残して「無物の物」は逃走し、「無物の陣」は再び現われる。不死身の「無物の陣」と戦う戦士は、「無物の陣中」に老衰するほかないが、しかし戦いは続けられなければならぬ。「過客」の旅人が、歩き続けねばならなかつたと同様に。そこに、近藤邦康氏のように、「一種の悲哀觀」を感じとることは可能であるが、無力感と戦いながら、戦いを続ける悲壯さとはいきれぬ明るさがある。

ニーチェは、野蠻人を嫌惡せず、野蠻人の中にこそ新しい力があるといつた。これは、的を射た動かせぬ言である。というのは、文明の兆しは、野蠻未開に孕まれるものであつて、野蠻人は外形こそ獸に似ているが、その内部には、かくれた光を秘めているからである。文明が花とすれば、野蠻は蕾。文明を實とすれば、野蠻は花である。進歩はここにあり、希望もまたここにある。(「マラ詩力説」)

といつたエネルギーが、まだ十分に自分の中に汲みあげられぬ悲哀感はあるが、「結局勝利のないたたかひであることが分かりきつていゝ」といふ無力感^④とは、やや異なるようである。

「野草」二十數篇の多くは、分裂し動搖するわが心の未知の部分に、鋭いメスを入れることに費やされたといつてよいが、『「野草」英譯本序』で、魯迅は、「野草」二十數篇を「ただその時々之感想を書きつけたもの」といい、幾つかの作品については具體的に事件との關係を述べている。その中で最大の事件は、「花なきバラの二」に「民國以來最も暗黒の日」として「三・一八事件」である。この事件についてはその當日から、爲政者とそのとりまき文人の責任を問う雜感を

執拗に書き續けているが、「野草」の「色淡わき血痕の中に」も、事件に對する鋭敏な反應を示したものである。「造物主」という、いわばすべての運命の支配者の、怯懦の故に失われた、人類の權利を恢復するために、忽然と「叛逆の猛士」が人間世界から生まれ出る。」

すつくと立つて、すでに改められ、またなお存在する一切の廢墟と荒墳を見つぐす。……

彼は、人類を蘇生させんとし、あるいは絶滅せんとして立ちあがる。……

造物主、怯懦者は恥じて姿をかくす。天地は、猛士の眼中にて色を變ずる。

“Ein Buch für Alle und Keinen”と副えられた“Also sprach Zarathustra”の「超人」の姿を「叛逆の猛士」のうちに見ることは、さほど不自然ではなからう。「無力感」のかけがえすとき、猛然と、相對立する「超人」のイメージが魯迅の念頭に浮かんたものと思われる。

「野草」のスタイルは、他の雜感集に含まれる若干の類似した作品を除いて、他とは獨立した存在であり、「誇張していえば散文詩」と魯迅自身規定しているが、「箴言」を用い、格調の高い短いセンテンスを積みかさねた表現形式は、「ツアラトストラ」に負うところが多いと思われる。思想内容については、對應する現實世界の相違と、把握の方法の相違を考慮にいれる必要があるが、「わが眞理へと來たつた」と自負するニーチェより、魯迅はいつそう忠實に“Untergang”したということができよう。

五

墳に至る「道は一筋ではない」と、魯迅自身も述べているように、彼の思想は、一筋の道を一筋の調子に進んで来たわけではない。それは「野草」においても、傾向の違う作品が一冊に収められていることで明らかであるが、それを、魯迅のことばによつて名づけるとすれば、「人道主義」と個人主義の二つの思想の起伏消長^⑧ということになる。

もちろん、それらは相對立する思想ではないが、時としては矛盾し相反する印象を興える。しかも、魯迅の作品には長篇はないが、中・短篇作においてさえ「起伏消長」があつて、構成の破綻を示すものがある。前節で述べた「野草」は、だいたい「個人主義」に傾いている。

「個人主義」は、「個人を重んじ物質を排除する」ニイチエの學說を意味することばである。「人道主義」は、「呐喊」「彷徨」など現實世界に取材した作品の主題をさすものであり、その根底には、文學は無力であるという確信がある。

「亂離の人となるよりも、太平の犬になるほうがましだ」というのは、舊小説中にしては見られる俗諺であるが、魯迅は體驗にもとづいて、この俗諺の意義を説明した。「燈下漫筆」で次のように述べてゐる。

一、奴隸になりたくても、なれない時代。

二、しばらくは、無事に奴隸でいられる時代。

この歴史把握の方法は、『先儒』のいはゆる『一治一亂』や、周作人の「言志派」と「載道派」の交代、という把握の方法と形式的には似ているが、「狂人日記」の主題である「人が人を食う」状況の設定では、過去の二つの時代を一括し、次にまつたく異質の新しい時代の出現を期待するものである。食われるという恐怖と人を食つたという自覺が作中の主人公において重ね合わされていることは、作者が歴史

をになう場にあることを示し、見る立場から歴史を把握したのではないことを證明する。このように、個人において實在する歴史が、階級關係では、支配者の奴隸性と、「暴君治下の臣民は、暴君よりも暴である」被支配者の奴隸性に重なつて現われる。こうした過去と斷絶し、歴史の犠牲者から人間性の恢復をめざして努力するならば、非人間的な現状の自覺へと進むのは當然である。「先儒」や周作人のいう、歴史を連續性においてとらえ、二つの時代が循環するのを見ると、平面的な論理と等質でないことは明らかであろう。

この歴史を把握する場合に、過去と斷絶しようとする意志が二つに分裂している。一方は、筆に力がないという確信によつて、「數人のものを起こして、この不幸な少數の人々に、いざれば助からぬ臨終の苦しみを興える」^⑨だけの行爲にためらいを感じることである。

自分の思想を他人に傳染させたくない。なぜなら、私の思想は暗すぎるし、しかもそれが確かかどうか自分でもわからないから。

(『兩地書』第一集、二四)

ある學生が私の本を買いに來て、ポケットから錢を出して私の掌においた。その錢には、まだ體溫が残つていた。この體溫は私の心に烙印をおした。今になつても、文章を書くとうると、いつもこのような青年を傷つけないかと心配になつて、筆をとるのをためらう。(墳の後にしるす)

このように、歴史を推進する青年が、絶望的になつたり、無用の血を流がすことを、極度に恐れる繊細さが、魯迅の發想のひとつとしてある。「人道主義」がこれにあたる。これが、「思想界の先驅者」^⑩とか「青年の指導者」というレッテルを、終始拒否させたのである。

他の一つは、民國という新しい時代が過去と斷絶するためには、わ

ずかな希望も否定できないということである。「狂人日記」を書いた理由を、錢玄同との對話で魯迅は説明している。「呐喊自序」に書かれたこの事實は、事實として承認すべきであろうし、また創作を最も熱心にすすめたのが陳獨秀であつたこと、それらは主將（陳獨秀）の號令に従う「遵命文學」であつたと述べていることなどから、作者自身の説明としては納得できるが、魯迅のいうたびたびの「挫折」によつて、青年時代の情熱は失われていたとしても、やはり言わねばならぬことがあつて執筆されたことも疑いない。わずかな希望とは、まだ生まれぬ人々の中に「超人」を期待することであり、たとえ「超人」は期待できないとしても、「人を食ひ」「人から食われる」悪循環だけは絶ち切らなければならぬからである。

悪循環の中におかれた民衆を、魯迅は「文化偏至論」などでは、露骨に輕蔑し憎惡している。その後の作品に現われる民衆も、描かれかたをみると、あまり好意を寄せていたとは思われない。もちろん、ふとした機會に見た人力車夫の行爲に大げさに感動し、「勇氣と希望をます」という「一件小事」のような「人道主義」の作品もあるが、魯迅の描く民衆は、結局ニーチェのいう「末人」である。たとえば、「故郷」における豆腐屋小町のエゴイズムのいやらしさ、身分を意識した閩土のいんぎんな保身術とその反面にひそむ陰險さ、少年時代の友情をもち續けて主人公の側から接近しようとしても受けつけぬ殺の固さ。一方、豆腐屋小町のなれなれしさには應じえない主人公。主人公と民衆の交流の道は、とぎさされているのである。「明日」の場合は、不幸な寡婦をとりまく民衆のエゴイズムに、民衆の間における交流もとぎさされていることがわかる。こうした、いやらしさ、愚かさをつきつめていくと「阿Q正傳」に到達する。

魯迅は、絶對的超越的存在としての「超人」の對極に、絶對的な無權力状態、完全な被壓迫者としての「阿Q」的農民の實在を自覺した。しかし、自覺したのは作品の完結後であつて、執筆のはじめにはまだ未整理であり、無自覺的である。それを物語るのは、序章の冒頭の論理の飛躍である。「不朽の筆が、不朽の人を傳えるべきである」という論理に従えば、魯迅が阿Qの傳記を書こうとすることは、魯迅が不朽の筆の持主であり、阿Qが不朽の人でなければならぬ。しかし、序章の敘述によつて、阿Qが「不朽の人」である資格に缺けることは明らかである。また、魯迅が不朽の筆の持主と自負していたと考えるのも無理であろう。とすれば、第一節で「阿Q正傳」を書かない理由が成立する。

私が、阿Qのために正傳を書こうとしてから、もはや一二年のことではなくなつた。ところが、書こうとは思ふが氣が進まない。

と書き出した當然の歸結である。にもかかわらず書きついだのは何故か。魯迅は「彷彿思想裏有鬼似的」という一句で説明している。この句の解釋については、すでに書いたことがあるので省略するが、論理を破綻させてもお書きつがせたものは、民衆を客體として定立させようとする意志である。こうして創造された人物は、社會の最下層にあつて、あらゆる惡徳を一身に具現する最もグロテクスな人物（中國小説史上で、これに匹敵するのは西門慶のほかはあまり）であつた。あらゆる敗北を、勝利とみずからにいいきかす恥知らずな人物を、執拗に描き續けることによつて、精神的勝利法の構造と、それがいかに運用されるかが明らかとなり、中國社會の全體像が浮き彫りされる。「阿Q」という人物の悲惨な最期は、結局世間になんの影響も残さず忘れ去られる。かくて、無内容な辛亥革命の實體が明らかとなり、阿

Qは時代のタイプとして「不朽の人物」となつたのである。

社會の最下層という場面の設定は、魯迅が歩き續けて墓の中に到達し、そこから振りかえつて現世を見た時と同様、現實世界のぎりぎりの地點へ到達し、そこを視點にしたことを意味する。そこでは、あらゆる惡徳を楯にしてのみ重壓にたえることができる。と同時に、假面で飾られた上層のすべての構造が見通せる位置でもある。「阿Q正傳」が書かれたのは、「人道主義」（魯迅の阿Qへの愛情は、諸家の指摘するところである）と「個人主義」の矛盾する面が衝突した時期であり、魯迅の苦悶が一方の極限に到達した時期である。

「彷徨」における「孤獨者」も、竹内氏の指摘のように、明らかに超人像を描こうとしたものである。超人は孤獨であり、愚衆と相容れないものであるとは、ニーチェのしばしば説くところであるが、「孤獨者」は范愛農をモデルに、「酒樓にて」以後、くりかえし暖められたり突きはなされて完成した知識人の理想像である。彼は進んでわが身を犠牲にし、自分の意志で死を選び、「かつて憎み反對した、一切のことをやつてのけ、かつて尊敬し主張した、一切のことをすて去つて」完全な敗北者となり、價値の軸を逆轉させて「勝利者」となる、阿Qとは別の場における傑出した人物である。盜品が返らなかつたと、刑場につくまで歌ひとつうたえなかつたことで噂に残る阿Qと、一人の革命家を墮落させ殺したという、絶対に消しえない倫理的汚點のみを敵（軍閥）に與えて滅亡する魏連受とは、好一對といえよう。「孤獨者」は、「死後」と「このような戦士」の中間の時期に書かれた。ちやうど「野草」において、「負」の世界から現實世界の構造を見ぬくことのできた時期と一致する。

私の心は軽くなつた。ゆつたりと、しめつた敷石道を歩いてゐる。

月の光を浴びながら。

この結びの一節は、裏側からしか勝利に形を與えることのできない重苦しさから、作者が自由になつたことを證明する。作中人物の「私」を通して、「勝利者」であると同時に「完全な失敗者」である魏連受を客觀視することができたのである。

現實世界における、假空的存在である阿Q、現實的存在である魏連受という「超人」と、假空世界における現實的存在である「叛逆の猛士」という「超人」によつて、世界はすべて包含することができるようになる。魯迅の強靱な精神が、現實認識の方法を確立することを可能にし、絶對者に身賣りして思想の奴隸となる危険から脱却せしめたのである。

「野草」を書き始めた一九二四年の秋から、三・一八事件によつて筆をおいた一九二六年春までの間に、絶對者を相對者に轉化することに成功し、超人への期待から、その非現實性の克服へと進んだ。後年、魯迅は狂飈社を論評して、次のようにいつてゐる。

ニーチェは、人々に「超人」の出現を準備するように教えた。もし出現しなかつたら、その準備は空虛である。しかし、ニーチェには獨自の退場のしかたがあつた。發狂と死が、それである。さもなければ、どうしても空虛に安住するか、あるいは空虛に反抗せざるをえない。たとえ、孤獨の中にあつて「末人」的な濫みを求める心がまつたくなかつたとしても、せいぜい一切の權威を輕蔑し、收縮して虛無主義者になるのがおちだろう。（『中國新文學大系』小説二集 序）

魯迅は發狂もせず、虛無主義者にもならなかつた。狂飈社とのもめごととは、一九二六年十月ごろから始まり、十一月にはたたく決意をし

ている。これが、魯迅におけるニーチェの運命であつた。

六

「故事新篇」は「野草」とも違う獨特のスタイルをもつ作品集である。一九二四年から三五年までにわたつて書きつがれているので、その間に執筆の條件も環境も變つてゐるが、最初の「補天」から最後の「起死」に至る八篇に、共通する特色がある。それは、古代英雄の群像を、タイプとして描き出すことと、それぞれの時點における社會評論という二つの要素を含んでゐることである。

外部の事件に觸發されて書く、あるいは書いてゐる途中で外部の事件の論評が加つたことについて、自身で説明してゐるのは、「補天」と「奔月」である。「補天」は、もともと「性の發動と創造、ないし衰亡を描寫するつもり」の作品であつた。ところが、新進作家に對する惡意の批評を見て、作家の將來を枯らせてしまうことに對する反感から、筆が「認真」から「油滑」にそれたと「故事新篇序言」で述べられている。そのことを魯迅は「油滑は創作の大敵であり、自分に對して不滿である」と自己批判してゐるが、「作品が目前にきたかと思つと、憎惡をこめて筆をすり、たちどころに高明きわまりない結論を下して、『ああ、幼稚さわるまる。中國は天才を求めてゐる』とやる」批評家を、汪靜之の「蕙の風」に對する批評の中に見つけ、創造する偉大なものと批評だけする卑小なものとの對比を強調するため、「油滑」に走つたのである。「油滑」は、「野草」が「認真」であるのに對して、「故事新篇」の特徴となるものである。

「奔月」は、魯迅が北京を去つて後、「莽原」による草素園、向培良ら青年たちの間で原稿の採否をめぐつて内紛がおこり、上海にいた

高長虹が、魯迅を攻撃する公開狀を發表し、またさまざまデマを飛ばしたのが、執筆の動機であるという。デマというのは、魯迅は廈門に移つて、教え子の許廣平と同棲してゐるというのであつた。しかも、高長虹が魯迅を攻撃する眞意は、ひそかに思を寄せていた許廣平を魯迅に奪われたからというのであれば、「文章を書く青年に對して、多少とも失望を禁じえない」「いかに青年であろうと、今後は情狀酌量すまい」と決心したのも當然である。

魯迅は、青年に裏切られる經驗をつんでゐる。最初は、時流にのり革命を食ひものにしてしようとする青年。次は、魯迅の家に出入りし魯迅から信賴をうけてゐるが、利用するだけ利用すれば敵になる文學青年。最後は、革命の根據地で、革命陣營内の分裂に乗じて革命派の青年を賣つて官憲にとりいろいろとする投機的な政治青年。魯迅の最終目標は、社會變革である。従つて、廣東での經驗が、青年に對する信賴を決定的に破壊し、進化論を疑うようになつたといわせたのであるが、青年に對する信賴を無條件にはもてなくするのには、高長虹も一役買つてゐるのである。

古代英雄をタイプとして描く特色が強く現われてゐる作品は、「補天」「鑄劍」「非攻」「理水」「出關」などであり、いずれも超人の面影がある。もともと超人的人物が擧げられてゐるので當然ではあるが、とくに「非攻」の墨子と「理水」の禹は、積極的行動性を代表し、「出關」の老子は、消極的行動性の權化ともいへべき純粹の超人である。

歴史上の人物を表裏から描いてタイプとしたのが、墨子と老子である。墨子は、超人的戰士が實際的勝利をめざして執拗に戦い、自分の行爲の報酬を求めず、自己を犠牲にできる人物として描かれてゐる。辯舌・戰術は群をぬき、政治的識見にすぐれ、組織能力があつて、し

かも縁の下の力持ちで満足する言行一致の人物といえ、十全の理想像である。老子は、一種爽快な完全敗北主義者である。墨子と正反對の位置を占めるが、行動者の面目は失われてはいない。

同じく一雙のはきものとはいってもじや、あれのは朝廷に上るもの、わしのは流沙を踏むものじやよ

という「ふかく澄みわたつた敗走宣言の響き」^②は、官途にはつかぬという積極的な意志にこだまするものである。魯迅は、くりかえし否定するが、老子的消極性をきらつて「漫畫化して關から送り出してしまふ」だけの意圖で書かれたとは考えられぬ。木山英雄氏は「『出關』雜談」で次のようにいつている。

精神的原理に發する氣の永い闘いに、勝利の可能性は本來絶望的に乏しいのが實情で、反抗の第一聲はそもそも勝利ゼロ、いかえれば百パーセント敗北の點からスタートするかたちにならざるをえない。……

彼（老子）の闘いの特徴は、一に自己の孤立敗北の痛みに固執することによりそれを闘いの根據と原動力にし、二に寸時のためらい、後退によつても崩れおちかねないその緊張を維持すべく、斷乎として退路を絶つてゐることにある。

ここで指摘されているように、完全な敗北を指向する積極性と、完全に勝利を目ざして勝利する墨子とは本来一體のものであり、兩極から、戦闘は全面的に把握されるのである。言行一致は、魯迅の文學的出發點からの希望であつたが、墨子・老子に念願がかなえられている。このような樂天性、明るさは、魯迅になかつたものである。しかし、「故事新篇」が外部の事件と對應する性格をもつ點に注目すれば、納得がゆく。

禹は結婚後四日目に家を出て治水に奔走し、「蚩尤の方法だ」とか「三年父の道を改むる無きは、孝と謂いつべし」とか「父の壘を幹う」といつた非難をしりぞげ、自己の決定を斷乎としておし通す人物である。

「わしは山澤の形勢を調べ、人民の意見を徴し、すでに實情を見極めた上で考えを決めたのだ。何がどうあるうと、絶対に『導』でなければならぬ。この同僚諸君も、みなわしと同意見だ」

彼は手を舉げて、兩側を指さした。……そこには、まつ黒な、やせて乞食のような代物が、動かさず、言わず、笑わず、鑄物のように居ならんでいた。

ここに居ならぶ人物は、すでに象徴的な超人ではない。みずから調査し、「人民の意見を求めて」決定する超人集團出現の宣言である。ボズネーニワ女士^③は、禹や墨子を、毛澤東や朱徳に擬している。また武田泰淳氏も、ソヴェト地區ができて成長している現實によつて、作品に明るさが出てきたと推定している。

このように魯迅は、ニーチェの超人と現實との衝突から、相反する極限を指向する發想法を生みだし、極限に到達することによつて全面的に包括する認識方法を確立した。またニーチェの超人から脱却した後、現實世界に恰好の人物を得て、のびのびと理想像である超人を描くことができるようになったのが、「故事新篇」であるといえよう。

① 周作人「瓜豆集」（宇宙風社）二三九ページ。

② 白話譯は「察拉圖斯忒拉的序言」（尼采名著）で一九二〇・六・一發行の「新潮」に唐俟のベンネームで發表されたが、文言譯は「察羅塔斯德羅如是說譯案」と題され、序三章の原稿が北京圖書館に保存されている。「魯迅全集補遺續編」の編者唐俟によれば、白話譯より前に翻譯されたものである。

③ 竹内好「魯迅」（世界評論社）、引用は、二二二ページ、五二二ページ、一八

三ページ。「……」は引用者の要約。

④ 「個人を尊重し……」は魯迅の「文化偏至論」にある句。

⑤ 竹山道雄譯「ツアラトストラかく語りき」上巻（新潮文庫）九七、八ページ。以下引用は竹山譯による。「隨感錄四十六」にも引かれている。

⑥ 「没落」(Untergang)を魯迅は「下去」と譯し「上去」の意味であると注で述べている。「成長のための自己破壊」(竹山)の意を、「下去」「上去」と理解していることがわかる。

⑦ 「魯迅日記」に一九二五年八月十一日に「ツアラトストラ」、十二日に「ツアラトストラ解釋並びに批評」を入手したとある。一九二九年八月十日にも「ツアラトストラ解説及批評」を購入している。かなり後まで、關心をもつていたことがわかる。ただし、關心が變つたことも當然である。

⑧ 「隨感錄四十一」で魯迅は、猿が人間と同類という學説は認めるが、猿が進化の意志をもたぬ理由を疑問とし、進化をおそれる猿の妨害のためかといっている。生物進化のメカニズムの中に妨害の意志を設定するのは、ニイチエの蛆虫——猿——人間——超人の進化のコースを考え、進化の意志をもつことを強調する（「ツアラトストラ序説」三章）。「進化的倫理觀」によるものと思われる。一〇三ページの竹内氏の「それはニイチエ的に影響した」がこの意味ならば、同感である。

⑨ 「中國新文學大系」小説二集序。本論文と直接の関係はないが、「却比果戈理的憂憤深廣」について小野教授から御教示を得た。「ゴーゴリの憂憤より深く廣い」という従來の譯文でもよいかとも思うが、魯迅の自作評價の態度にもかわるので、さらに御教示が得られれば幸いである。

⑩ 「過客」については、「魯迅研究」二五號に「野草」の両面」という拙文があるが、論旨を明らかにするため多少の重複をあえてした。

⑪ 中野美代子「魯迅雜文の發想の諸形式」(『現代中國』三四號)は、精神的考察によつて屈折型と投射型に二分類し、發想の型を検討しようとし、丸山昇「野草」に於ける魯迅(『魯迅研究』二四號)は、五の系列にわけ、身邊雜事から内心の吐露、外界との戦闘その他に細分類し、それを一本の線で結ぼうとしている。

⑫ 拙論「野草」における負の世界」(『魯迅研究』二四號)において、現實世界の軸を一八〇度回轉して設定された架空の世界を「負」として、「死火」「墓碑銘」「死後」の三篇について論じた。本論文と一部重複する。

⑬ 「春末閑談」でフアーブルの説をひいて、腰細蜂の殘忍さとして述べているが、よほど強く印象に残っていたのである。

⑭ 近藤邦康「このような戰士」他(『魯迅研究』二四號二〇ページ)

⑮ 前掲書二一ページ。

⑯ 「自選集」自序。

⑰ 「兩地書」第一集、二四。

⑱ 周作人「中國新文學的源流」第二講「中國文學的變遷」

⑲ 「吶喊自序」

⑳ 「吶喊自序」でも「苦しい思いをした寂寞を、私の青年時代のように美しい夢をみている青年に傳染させたくない」と述べている。

㉑ 高長虹が「新女性」にのせた廣告で魯迅に冠せた稱號。「兩地書」第二集、七九。

㉒ 「私はどうして小説を書くようになったか」

㉓ 「吶喊自序」で述べている事實を、「違命文學」と命名した『自選集』自序」に説明がある。

㉔ 「魯迅研究」五號「彷彿思想裏有鬼似的」から

㉕ 「兩地書」二集、六〇では高長虹の公開状をわずらわしいといっているが、七九ではやつつける決心をしたと述べている。

㉖ 「私はどうして小説を書くようになったか」、「故事新編序言」では、「プロイト説でもって創造——人間と文學の——の起原を解釋しようとした」と述べているのは、やはり「性」を通して見る觀點をたてようとしたことをいうのであろう。

㉗ 「天才の出る前」

㉘ 「兩地書」第二集、一一二。

㉙ 同書、八五。

㉚ 同書七九。

㉛ 「范愛農」の中で、王金發入城後の紹興で新聞を經營しようとした、この種の青年について述べている。

㉜ 「兩地書」第一集、一七に、高長虹とは一部意見が一致すると述べている。「魯迅日記」によれば、一九二四年末からしばしば魯迅宅へ來ている。

㉝ 二集九五では、利用するためには悪口をやめるといふ尙斂や、向培良のあつかましが述べられている。

㉞ 「三間集序」 増田涉「魯迅の印象」(講談社) 六四ページ。

㉟ 木山英雄「出關」雜誌(『魯迅研究』二九號三ページ)

㊱ 小野忍「外國における魯迅」(『魯迅案内』岩波書店)により引用。次の

武田泰淳氏の推定も同書より引用。

附　ここでとりあげた作品、並びに作品集は、さまざまに解釋しうる要素を含んでいるので、一面だけとり出すことは、不當にある傾向だけを強調することになるが、ここでは、魯迅の發想のうち超人への期待とそこからの脱却、その後は願望としての超人ではなく、現實に存在する超人集團の發見によつて、現實に進行する革命運動に對する立場と認識方法の確立を明らかにしようとした。きりすてた中で、「人道主義」とよんでいる、流される血に對する恐れ、犠牲を求めぬ發想は、「藥」から始まつて「宮芝居」「雪」「風」など少年時代の回想に進み、「朝花夕拾」に集中的に現われていると考えら

れる。これが本論文の發想法と重なつて、民衆への親近感となり、勞働者の發見へ進むのであるが、ここでは省略した。

本論文は一九六〇年度の小野忍教授を代表者とする総合研究「中國近代文學成立の前提條件とその特質に關する研究」の分擔課題「近代作家の文體とその發想の研究」の報告の一部である。

魯迅の翻譯は、岩波版「魯迅選集」を参照した。また、原典を讀むにあつては魯迅研究會の諸兄姉の援助をうけた。あわせて感謝の意をあらわした
い。